

第7回 小豆島町総合教育会議

【日時・場所】

○開催日時 平成28年1月20日（水） 午後1時半～

○開催場所 研修室

○出席者 塩田町長、後藤教育長、熊坂委員、岡田委員、黒木委員、岡本委員
森口小豆島町議会議長、大川小豆島町議会副議長
安井教育民生常任委員会委員長、中松教育民生常任委員会副委員長
岩澤小豆島高等学校校長、小玉小豆島中学校校長、片山池田小学校校長
羽座星城小学校校長、三浦安田小学校校長、川井苗羽小学校校長
慈氏草壁保育園園長

○同席者 【町職員】

松本副町長、松尾副町長、空林総務部長、坂東教育部長、松田社会教育課長
後藤子育て共育課長、高橋教育指導室長

【教育関係者】

安藤園長（星城・安田・苗羽幼稚園）

川口園長（旭・福田幼稚園、内海保育所橘・福田分園）

中多小豆島こどもセンター園長、増田小豆島こどもセンター所長、
大岡内海保育所所長、

○傍聴者 14名

○事務局 4名

【内 容】

[塩田町長] 挨拶

第7回小豆島町総合教育会議を開きます。7回目ということで、今までは香川県教育委員会の課長や町民の代表者の方のご意見を伺ってきたが、この小豆島町総合教育会議の任務として、小豆島町の教育大綱を作ることが法律で定められている。教育大綱については、町長が総合教育会議の意見を聞いて決めることになっていたかと思う。年度内にまとめられたらよいが、多分年度をまたぐかと思われる。小豆島町の教育大綱の叩き台が3月か4月頃に事務方から提案があると思うが、これから2度3度、教育大綱をまとめていくうえで前提となることについてフリートークしていきたいと思う。今日からは町議会の方も入ってもらい、校長先生達にも入ってもらって、教育について話していきたいと思う。今日は事務方がまとめた2枚と、教育についてという私の考えをまとめたものがある。それでは事務方から、資料の説明をお願いする。

[坂東教育部長] 挨拶

フリートーキングのテーマということで、資料について説明する。本日の総合教育会議

において町議会議員の皆様、校長先生の皆様からフリースクールという形でいろいろなお意見をお聴きするという事で、教育委員会として考えている課題・問題点、またこれまで町議会の方や自治連合会その他町民の方から教育委員会に対して、問題提起としていただいたことを3つの項目に分けて記載している。

まず小豆島町では「ふるさとを愛し、人間性豊かで、たくましく未来に生きる人づくり」という教育目標を掲げて、これまで教育に取り組んでまいった。

1 点目が新しい高校を生かした文武両道の人づくりである。この中で一貫教育の実践、特別支援教育、小豆島高校の跡地の活用というように掲げている。

最初に一貫教育の実践ということで、高校では1 番目の文武両道の魅力ある新しい高校を創るための体制づくりから、5 番目のバス通学に対する、フリーパスの運賃が3 月2 0 日以降、上限 300 円になって通学定期もかなり割安になるが、さらなるバス通学の助成を行わないのか、というような課題を掲げている。次に幼・保・小学校・中学校については、大きく分けて、幼・保、小、中、高の一貫教育を実践するためには、どのような進め方がいいのかという課題が1 点ある。また、家庭教育の大切さとか、基本的生活習慣の定着とか、教職員の資質向上、コミュニケーション教育等、全部で1 0 点の項目を掲げている。

次に特別支援教育については、昨年秋に小豆地区特別支援学校設立に向けて県知事、県の教育長、県議会議長の方に、土庄町と両町で設立の要望を行っているが、今後実現に向けてどのような取組をするのか、ということが課題としてあげられる。

最後に、小豆島高校跡地の活用については、香川県教育の方が司会になり、跡地利用の検討委員会がある。その中に土庄高校と小豆島高校のそれぞれに分かれて検討委員会があるが、小豆島町内にプロジェクトチームを設置し、今後幅広く意見を聴く必要があるのでは、という課題を掲げている。

2 点目は、すくすく子育て応援アクションプランの実践ということである。保育所・幼稚園と、子育て支援ということで、2 つ掲げている。

保育所・幼稚園については、苗羽地区の方で苗羽小学校内に設立する、内海保育所と苗羽幼稚園を合わせた認定こども園について。その建設後、星城幼稚園、安田幼稚園、その他の内海地区の幼稚園の存続について、今後どう考えるのか。どのような幼稚園教育を実施していくのか。その他、保育所・幼稚園の保育料を無料化できないのか。

子育て支援では、地域ぐるみでの、子育てを応援する施策について、今後推進していくためには、各地域で何らかの組織・体制づくりが必要でないか。という課題を掲げている。

3 点目は文化・芸術の振興、健康づくりの推進ということ。項目としては5 つ掲げている。

一つ目は公民館である。今後公民館をさらなる地域コミュニティの拠点として、より充実していくためには、どのような施策が今後必要になっていくのか。

芸術振興では三都半島が中心となるが、三都半島アートプロジェクトの今後の活動とか、これまでの活動に対して、どのような見直しを行って今後実施していくか。文化協会会員の会員数・団体数をどのように増やしていくか、今後充実・発展させていくか。

次に文化財関係では、現在古文書の調査を社会教育の方で実施しているが、そのような文化財の掘り起しや今後の保存について、どういう形がいいのか。

健康づくりの推進については、運動教室等現在取り組んでいるが、長く続けていくためには、指導者の育成が必要ではないか。公民館や各町立の体育館等が建設後3 0 年4 0 年

とかなり年数がたっているので、こういう施設についての計画的な改修や建て替えについて、今後どのような計画を立てて考えていくのか。

最後、社会教育全般については、これまで町民の皆様からそれぞれのご活躍の分野のことに対して、音楽の方では音楽ホールがほしいとか、温水プールがあった方がいい、総合体育館、大きな体育館が欲しい、というような要望があるが、こういったことに対して町として今後どう考えていくのか。生涯学習のまちづくり事業、学校支援ボランティアの活性化について、どのように図っていけばよいか。というような課題を掲げさせていただいている。

[塩田町長]

質問等は後でまとめて行うことにして、もう一枚、教育についての紙について説明する。教育については皆様ご意見をお持ちであると思うが、この紙は私が普段思っていることを順不同で書いたものである。

一番目は、子どもが育ち、伸びるとは何でしょうか。教育とは何でしょうか。というそもそも論。

二番目が、小豆島の教育の長所と短所とは。長所が減り、短所が増えているのでは。私の子どもの頃の経験・体験では、長所というのが、海や山や自然の中で遊べたこととか、地域の中に先輩や後輩がいて、もまれる場所が小豆島にはたくさんあるということである。短所というのは、一流の文化やアート、音楽などに、都会に比べると接する機会が少ないということである。6年間見てきていると、長所の部分はほとんど失われていて、短所は、都会の方が恵まれているので、相対的に田舎の子どもと都会の子どものギャップが大きくなっていると感じている。

次も同じようなことだが、家族や地域社会の変容に応じて、教育の役割、在り方は、変わらないといけないのでは。家族や地域社会の共感力と教育はどういう関わりがあるのだろうか。かつてあった家族や地域社会という力が相当落ちてきているので、その分教育の負担が増えざるを得ない、という問題意識を持つ必要がある。学校だけに頑張れということとはどうかと思っており、家庭や地域社会も頑張れるようにしないといけないのではないかな。

いい先生とはどんな先生でしょうか、ということで、私が子どもの頃のいい先生と、今のいい先生とは違うのではないか、と思っている。どうしたらいい先生に来てもらったり、いい先生になってもらえるか。学校の先生だけにすべてを担ってもらうのは無理で、学校の先生ではない、人生の先輩やいろんな人が、応援団として学校教育に加わる必要があるのではないかなと思う。

一貫教育はなぜ必要ですか、ということだが、実はよく分からない。私の体験では、小学校、中学校、高等学校と家から一番近い学校に行ったが、私自身としては一貫教育を受けていたと感じている。勉強とスポーツ、文化、人格形成、全部違うと思うが、どう考えていけばよいか。

新しい高校について「文武両道」を目指す、というスローガンはいいが、そもそも「文武両道」とはなんであるか。一人の人間が文武両道でなければならないと言われたら、私は勉強はできた方であったが、スポーツは全くできなかった。だとすると、一人の人間に文武両道を求めるとしたら、これは大変なことである。よく詰めた方がよいのではないかな。

自分の子どもは東京で育てたのだが、小豆島の子どもたちは、都会の子どもたちに比べて恵まれ過ぎているような気がする。特に、車で学校に送り迎えをしてもらっている子どももいるようだが、少なくとも、都会のほとんどの子どもたちは、満員電車や満員バスに揺られて学校に通っている。

つながることだが、こうした小豆島で生まれ育った子どもたちが都会や海外に出て、都会や海外で育った人の中で活躍できるのか。国際化していく社会の中で、コミュニケーション能力、自分の考えをちゃんと言えて、相手の意見をちゃんと聞ける、という能力を備えられるか。ご存知の方もおられると思うが、平田オリザさんという脚本家の方が小豆島に来てくれている。彼は大阪大学の先生を長くされているが、大阪大学の文系に行く学生、小豆島で言えば超優秀な学生ですが、そういった地方の公立高校を出た勉強のできる子が、コミュニケーション能力が乏しく、授業や大学生活についてこられない子が目立つ。ということを知って愕然とした。

障害を持った子どもの教育。そして、いじめ、不登校。教育長に聞くとありませんという報告を受けるが、別の方からはいじめで大変であると、厳しく言われた。どちらが正しいかはわからないが、なければよいというものではない。

とてもいい子ばかりになっているな、という気がする。小豆島の小学生、中学生、高校生を見て、もっと悪い子がいてもいいような気がする。そして、ふるさとを思う子どもはどうしたら育つか、アート、芸術、文化について、ということである。

今日はまとめる会ではないので、質問があれば言っていたきたい。次回の2月26日は、演劇の公演に来られている平田オリザさんから、コミュニケーション能力の話や、大学入試が間もなく大転換するという話を聞く。今は記憶力中心の大学入試であるが、今後は表現力やコミュニケーション能力中心の大学入試になるそうである。都会の先進的な学校では、今までの教育とは全く違う学校教育の内容になっていると聞いている。そういった話を次回は聞いて、3月の総合教育会議で教育大綱に向けての議論をもう一度したいと思う。それでは順に質問等、お願いします。

[森口小豆島町議会議長]

私が感じることは、登校拒否の子どもが増えてきて、毎年いると聞く。この原因は何かということで、私が保護者の時に言われたのだが、幼稚園の先生が「その日に子どもたちが気持ちよく幼稚園に来てほしい。来てもらえる体制作りが最初です」という話を聞いた。これは小学校、中学校に上がっても続いているのではないかと思う。勉強について、宿題は家で必ずするというが、今の子どもは学校の授業が終わって放課後はクラブ活動などいろいろとしているので、限られた時間の中でなかなか勉強ができない、宿題も十分にできない子がいるのではないか、ということを学校本部に言った。後ろから見てみると、全員をレベルアップさせることは難しいとは思いますが、授業についてこられていない子がいるのではないかと感じる場合がある。少人数学級で取り組んでおられて、少しでも解消されているとは思いますが、最終的に高校、大学に行く場合、基本的な小学校、中学校の勉強ができていなければ、上に行ってもできないのではないか。学校によってどのような対応をしているのか。

[後藤教育長]

不登校の原因であるが、今中学校で17、8人いる。その原因を見てみると、子どもと先生との関係というよりも家庭環境の中の原因が多く、学校からいってもなかなか改善されない場合が多い。そのあたりは地道に家庭と話し合いを持ち、少しずつ学校に向かえるように、まずは保健室登校からという形で行っている。

[塩田町長]

私が中学生の時も不登校の生徒はいたが、その時代と今の子どもの不登校の理由は違うのか。私たちの場合では、来ない理由が明確に分かっていたように思われる。

[後藤教育長]

今の子どもたちは、一つは精神的脆さがある。少しのことで折れた場合、なかなか立ち直れないといったことがある。あと、保護者の方の考え方が多様化していて、学校に行けと押してくれる家庭よりも、家でいたらいいいという家庭が増えてきていることは事実である。

[塩田町長]

専門家でも不登校は不登校でいいのではないか、という意見もあるがどうお考えか。

また不登校の生徒は高校を卒業する年齢になったらどうしているのか。知り合いに大学検定などを受けて東京で活躍している子もいるがどうか。

[後藤教育長]

学校としては、全員来てもらい少しでも本当の教育を受け、人格の形成が固まることをしていただきたいという願いがある。不登校の子は高校を卒業する年齢になってもほとんどの子が家にいて、中には仕事に就く子もいるが、それはまれであり、パーセントで見れば低くなっている。

学力のことだが、小学校の時の学力がすべてに影響していくということだが、学校としても、学習指導要領に基づいて行っているが、完全に100%出来ているかと言い辛いのが現実である。だいたいクラスで1、2割の子が遅れて進むというのが現実である。それについては放課後とか補充学習という形で補っているが、なかなか身につかないのが現実である。しかし放っておくという姿勢はなく、何とか係って少しでも力をつけていただきたいというのが、我々、学校の先生方の気持であるし、実際に行っている。

[塩田町長]

全体を平均すると私たちが小学生、中学生の頃と遜色はないが、ものすごく勉強できる子が少なくなったと感じるがどうか。

[後藤教育長]

飛び抜けて勉強のできる子は減ってきていて、平均化しているのは事実である。学校の校長先生方から学力についてのお話はありますか。

[片山池田小学校校長]

教育長から話があったように、学校としても子どもたちに何とか学力をつけていきたいという思いは当然持っている。一番は各学級で授業をどれだけしっかりできているか、ということが一つ。本校でも少人数指導ということで、クラスを2つに分けて、その子どもたちに応じた指導課程を組みながらできるだけわかる授業を行っている。なかなかわかり難い子にはじっくりと、早くわかる子については問題数を増やしたり難しい問題をしたりだとか、自分たちで解き方を考えていくような形で、学力が低い子も高い子も少しでも伸びるような形で授業を行っている。それでもわからなければ補充学習を放課後行っていく。その学年で学ぶことがわからなければ、次の学年で必ずつまづく。2年生で言うと、例えば九九ができなければ、次の3年生からの算数で必ず引っかかってくる。なので九九については2年の間に必ず全員がとらえられるようにしなければならない、と考えているので取り組んでいる。

優秀な子がいるかどうかということは、各学年の状況によって違ってくるが、本校の今年度の様子を見ているが、今年度の県の学習状況調査があったが、子どもによっては、例えば5年生で4教科国語、算数、理科、社会をして、3教科で満点だった子もいるのも事実である。

[川井苗羽小学校校長]

私の方からは2点話をしたい。1つは学力というとらえ方が変わってきて、本校では昨年からアクティブラーニングということをやっているが、先ほども話があったように高校大学の入学試験が変わって、アクティブラーニングの手法を取り入れた入試になっているような現実がある。今日もわたなべさんに演劇指導していただいたが、その中にもアクティブラーニングの要素がたくさん入っていた。

本校でも今年度から全教科で子どもたちが司会団を立てて授業をするというような特殊な方法をとっている。なぜかという、先生方が授業観を変えてもらい、いつまでも自分が先頭に立って子どもたちを引っ張っていくという授業ではなく、教師がきちんとした計画を立てたもとで、子どもたちが自分たちでやっているという主体性の部分を大事にして、自ら学んでいこうという力を育てていこうという風になっている。教科の内容が教科の定着にリンクするのかどうかということが、大きな関心ごとであるかと思われるが、必ずそれがリンクしていくということを、私たち教師集団がやってみて、実感を持っている。そうしないとアクティブラーニングという形は成立しないんだという実感を持つことができたのが、大きな成果の一つであると思う。

もう1つ本校で1年間で成果が見られたこととしては、主体的な態度が子どもたちの中で大きく育ったということである。昨年度の県の状況調査で本校のまとめを改めてみると、主体性に伸びが見られるものの依然として課題であるというようなまとめとなっていた。今年度の状況調査の結果を見ていると、主体性の中に県があげている5項目というものがあるが、この5項目すべてで対象学年全部の項目で以前よりも大きく伸びを見せており、効果があったかと思う。項目、学年によっては10ポイント以上県の平均よりも主体性が伸びている。まずは子どもたちがやる気になって勉強に取り組むという姿勢が育つのだということが見られたと思っている。

もう一点、学校という枠を超えて町という枠で話をさせていただく。学力推進部を幼・保から高校まで一貫して本町の場合は作ってもらっている。そこで学力の問題を話し合っ

ているが、算数での領域において、本町では弱さが見られるということが懸念としてあげられていた。その具体的な取り組みとして、昨年度からこれだけは上にあがるときに身に着けておきたいという項目を各学年で絞り、どの学校に行ってもその項目については100点を目指そうということで、頑張っている。

昨年度は教職員向けのパンフレットを作り呼びかけるとともに、評価問題ということで全町一斉に行った結果を教職員の中で共有化してさらに伸ばしていく方法を考えたという次第である。今年においては全保護者にそのパンフレットを配った。それは保護者の方にも、こういったところが課題であるとともに学校でも頑張っています、ということをお知らせするとともに、学校教職員が説明責任を果たしていく姿勢を持ってほしいと思ったからである。評価テストを今年も行い、さらに子どもたちの定着の度合いを見て行くということ、今やっているところである。

[三浦安田小学校校長]

安田小学校では主体性の教育ではないが、キャリア教育について取り組んでいる。何が変わってきたかということ、自分はいいいところがある、将来に対して夢や希望がある、ということはアンケートを取れば出てくるようになった。しかしそれに対して今の力が顕著に伸びてきたかということ、そこが本校ではまだ課題である。授業の改善については、各学校でも取り組んできていると思うが、子供にそれだけの力がついてきたかといわれると、まだまだかと思う。

[羽座星城小学校校長]

本校でも子どもが主体的に取り組む授業はあるが、その取り組み方のなかで、本校の教員に言っているのは、ただ方法に流れてはいけないということ。子どもたちが主体的にかかわることによって意欲を持っているというところもあるだろう。だが授業の内容について子どもがわからなければ、子どもというのは学習意欲がわからないだろうと考える。だから子ども達が身に着けるところは身に着けなければならないし、子どもたちに任せる部分はどこなのかということ。教師がしっかりと管理し、形に流れてはいけないと話をしている。

[後藤教育長]

4校のお話を聞いたが、主体性という子どもへの取り組み方はどの学校もやっているが、結果として出ているか出ていないかということだと思う。苗羽小学校のように子どもたちが前へ前へ出て授業を進めるやり方もあるし、先生がやってみてここが子どもの出番だよと子どもに任せるか、という形で各学校工夫している。安田小学校はキャリア教育の視点を持って将来を見据えて、これから希望に向けてどういうことをしていけばいいのか、ということをしている。まだ苗羽小学校のように、ここまで成果が出たということは言いきれないというところが現実であるかと思う。

[塩田町長]

キャリア教育というのは一言でいえば何か。

[三浦安田小学校校長]

キャリア体験というと、中学校で職場体験するというようなことのイメージが浮かぶかと思うが、職業教育とは違う。自分がどのように生きるか、自立と社会貢献、これを身に付けさせるものだと、私はとらえている。

[塩田町長]

そのことについて冒頭でも述べたが、例えば琴勇輝に来てもらって話をしてもらえれば、頑張ろうという気になれると思う。小豆島の中でいる我々大人では活躍の世界が狭すぎる。島外に出ている先輩やいろんな人に接触できるようにして欲しいと思う。たとえば町長を呼んで話をしてもらうとか、小学生だと琴勇輝の方がいいかと思うが、中学3年生以上には一流の人を呼んで、自分が目指す具体像の人と接触しないといけない。これが都会の子どもとの大きなギャップになっている。都会では実際に素晴らしい人に会える。教育委員会で今年はこういう人を呼んでこういうことをすると、決めて欲しい。

[後藤教育長]

町長が言われているように一流の人を呼ぶということは、以前から言われていた。教育委員会でリストアップして、今後計画的にしていきたいと考えている。中学3年生、小学生に向けて、皆さんが知っている方、夢を持てる方をお呼びしていけるように頑張りたいと思う。

[大川小豆島町議会副議長]

小豆島町の教育については、議会の方でも出ていると思うが、幼稚園の統合、小学校の統合は、ある程度もう時期が来ていると思う。そこを定めてから、教育について語っていかなければならない。それぞれの小学校で、それぞれの幼稚園でどうこうというのではなく、小豆島町全体として一つの幼稚園一つの小学校ということで、もう考えていくべきだと私は思う。その中で私が一番大事であると思うのは、やはり就学前のお子さん、小学校低学年のお子さんに対する、当然学力は必要であるが、体力や精神力とか礼儀作法とか、大きくなったときに社会に出て耐え得る精神を、小さいときに育てる必要があると思う。私に子供が3人いるが夜8時には寝かせていた。それがいいのかはわからないが、十分な睡眠をとって、昼間は幼稚園や小学校で勉強して遊ぶという生活をさせていた。今見てみるとそれが本人にとって役に立っているのではないかと考えている。

もう一点、高校に関しては来年一つになるが、やはり小豆島町と土庄町が高校の教育に関して話し合えるような場をこれから持っていかなければ、小豆島町だけで新しい高校ではこうするというのではなく、両町が足並みをそろえて一つの方針でやっていくということを考えていかなければならないかと思う。

今の子どもたちに必要なのは、競い合わせるということ。先ほどもいったように、小学校の統合が必要。一クラスでは最初から番号がついてしまっている。学力面、体力面についても、いろんな面で最初から序列がついてしまっている。それが6年間続く。中学校は統合したのでクラスが増えたが、一クラスでは競い合うこと、切磋琢磨ができにくいのではないか。ですから統合はもう遠くないのではないか。そういった方針を決めてから教育を語った方がいいのでは、という風に思う。

[塩田町長]

小学校と幼稚園の統合の問題はとても大きい話であるので、一度会を改めて議論した方がいいかと思う。自身の体験としても、地域の人に見守られながら小学校に行くことが、ふるさとを愛する気持ちにつながるという前提で、今ある小学校は残したい立場ではあるが、一度皆さんと議論したいと思う。メモにも書いたとおり、私が前提としている家族や地域が、私が考えているものではなくなっただとすれば、ないものを前提として小学校だけを残すということは、論理的に破たんしている。地域社会を、小豆島町全体を一つの地域社会として考えるということが論理的に見える話であると思う。

高校の話だが、新しい高校について土庄町教育委員会とどのような話をしているのか。町長になって驚いた話だが、教育委員会表彰というのがあるが、そこに高校生がいなかった。高校は県の教育委員会であるから、表彰しないということを後藤教育長に言われて、ショックを受けた。そのように、今までの市町村の教育委員会では高校というのは県の教育委員会の問題で、私たちはノータッチであるということが正直なところであるかと思うが、新しい高校について土庄教育委員会とどのような話を行っているのか。

[後藤教育長]

正直なところ、まだ具体的な話は進んでいない。というのも統合のところで両町の教育長が出て、両校の校長先生の中で話し合いするくらいで、具体的にこういうことをしようという話し合いができていないのが現実である。テーマを持ってこれから話し合っていかなければならないと考えている。28年度中には話を進めていくつもりではいる。

[岩澤小豆島高等学校校長]

現在、土庄高校と小豆島高校と県教委、両町の教育長が集まり、今後の統合高校の準備委員会を立ち上げている。この中で新しい統合高校の教育内容も含めて、どのような在り方を目指すのかという話し合いをしている。ここにある通学支援を含めたいろいろな話をしている。この会は統合まで続くと思うので、その中で県にテーマを持ち上げていき、協議するのは一つの手ではないかと考えている。

[塩田町長]

住民の立場から分かりやすい例を言うと、新しい高校の野球部が引き続き甲子園に行けるくらいのチームにしようと思えば、まず杉吉先生を留任してもらいたいということから始まる。そう考えると新しい高校は来年の4月からスタートするのではなくて、もうスタートしている。例えば校歌はどうなるのかという声がある。校歌はとても大事である。そういう島民の生の声が県に届くようにするにはどうすればよいか。

[岩澤小豆島高等学校校長]

校歌についてもそうだが、全て準備委員会の方で意見を吸い上げるような形になっている。ですので、一番県に声が届きやすいのは準備委員会なので、代表である私、または教育長の方に意見を伝えていただくと、それを伝えることができる。町含めて学校側の態度としてはこういった風にしていただきたいという方向で行けると思う。校歌の方も県が決

定するが、公募するのか、代表者を出してそこで協議していくのか、こういった形で決定するのかというところはまだ決まっていない。今現在、準備委員会で吸い上げるべく取り組んでいる。

今は野球部の部員は両校分かれて練習や試合に出場するようになっている。交流授業として両校の部活動全般で、一つになるのだからと今年度からこの1年間、来年度も含めて、交流して練習試合等をやっていく予算がついている。そうして部活動の強化を図っている。指導者の件だが、最終的には県の決定であるが、こちらの意見や要望は反映してもらえるように、校長としては言っていきたい。

[塩田町長]

新しい高校は県内どこからでも受験できるようになるが、甲子園に出場したら県外からも受験したいという人もいるのではないかな。どうなっていくのか。

[岩澤小豆島高等学校校長]

統合する平成29年の4月、その時には全県一区になる。なので、この統合高校に三豊から受験することも可能である。現在は2学区になっており、高松から小豆島を含めた東の普通科は、そこに住居がある生徒しか受験することができない。だが統合した時には全県一区であるので、どこからも受験できる。そういった意味で、野球とか陸上とかで希望する生徒がいる場合には、総合した暁にはそれが可能になる。

そこで問題となるのが、住むところであるが、それに合わせて寮を完備することができる。36名が入寮できる寮であり、基本的には通学支援である。遠いところから通うことが難しいから、ということなので、当然島内の生徒でも通学が厳しいという生徒がいたら、そこに入ることができる。ただそれを学習に特化するのか、部活動に特化するのか、そういったところは議論されていない。そういった寮等も含めて、県内の全域の生徒の募集をしている。

県外の募集としては、一家転住する生徒に関しては、従来のルールと同じで通り受け入れ可能である。統合した以降も一家転住があれば受け入れるようになる。ただ、これを町として人口を考えると、町の政策・事業として、一家転住しなくても高校のために県外から住まわせることが必要であると、県にアピールして、いろんなやり方が特区扱いとしてもらえるよう議論できるのではないかな。

[塩田町長]

島根県の隠岐高校では4割くらいが県外である。島根県でそこを特区扱いしているそうだが、先ほどから出ている、子どもの数が少なく切磋琢磨が足りないという観点からしても、私自身県外の子どもの受け入れには大賛成である。実現するためには、開校してからでもよいが、今から打ち出しをしていかなければならないと思う。

[岩澤小豆島高等学校校長]

県外からの生徒を受け入れると、入学定員が決まっているため、中学校卒業する生徒の一定の割合を考えると、島内の生徒が押し出されるという形になるのではないかな。

[塩田町長]

人によって意見が分かれるかと思うが、社会人になればそうなるのだから、厳くしないと、という意見も成り立つのではないかな。

[岩澤小豆島高等学校校長]

現在、島外枠を別枠として取れないかと考えている。実現できるか、県協議会と議論をしていきたい。

[小玉小豆島中学校校長]

中学校の校長としては、本校の生徒、小豆島高校、小豆島中央高校を志望している生徒は全員受け入れてくれるとおっしゃっていただいているので、その点は安心している。全日制と定時制合わせてということになるので、生徒の学力に応じて、定時制に三修制というものも新しく入るので、子どものそれぞれの力に応じて受け入れていただけるということで、ありがたいと思っている。先ほどの学力の問題でもあったが、志をしっかりとって上を目指していくような生徒、コミュニケーションできる生徒を育てていく必要があるのではないかな。

[安井教育民生常任委員会委員長]

委員会では出されている問題点・課題にはソフトの面が多いが、部活動が校内で完結していない。教育委員会として問題意識を持ってもらいたい。校外へ出ての活動となってくると、また新たな問題が出てくる。先ほど大川副議長から言われていたように、問題解決を図っていただきたい。B Gでは社会教育の方で使ったり、地域の方が使ったりということで、部活動に制約が出てくる場合もあるだろう。そのようなことを考える中で、社会教育の部分と学校教育の部分とで住み分けができるような施設の在り方は必要ではないかな。また、内海地区の小学校は、池田の地区は統合して土地が広いこともあり、運動場が狭く感じる。いろんな活動に制約があるのではないかなと思う。子どもたちがのびのびと活動し、教育を受けることを考えると、課題があるのではないかな。

[後藤教育長]

安井委員長から言われたが、現在確かに中学校の部活動が校内でできず、いろんな所へ出て行っている。B Gのグラウンド、体育館などを使っているのが現実である。逆に考えれば、香川県で一番施設が多くあるというところもあるかなと思う。しかしそこへ向かう道中が大変危険であり、安全性の問題があるというのはおっしゃるとおりであるので、どうするかを考えていかなければならないと思う。特に安全面に関してはこれからの課題であると思う。今中学校にお願いし、学校の先生に時々立ってもらい指導をしているので、そういった具体的な方法をとって確立していく。

内海地区の小学校は3校あるが、校庭等が狭いということは、その通りである。池田小学校の校庭・運動場はかなり広いので恵まれていると思う。その中で3小学校がいろいろ工夫をして、池田小学校に負けないように運動や体力向上に取り組んでいると思うが、広さについては、大川副議長の話にもあるが、今後のことを考えて議論していかなければならない。

[塩田町長]

教育長としては統合についてどう思うか。

[後藤教育長]

私としては統合しなくとも、今現在の4小学校が切磋琢磨しているので、十分やっていると考えている。学校間の競い合いをしていることで、小豆島地区の小学校は県下でもかなり高い学力である。

[安井教育民生常任委員会委員長]

根本的な解決にならないこともあり、物理的なことも考えて議論していかなければならないと思う。人口が3万人を切ったということでも、将来を見据えた教育委員会での方針というものを、島民の皆さんに示していく必要があるのではないかと。計画性を持ってやっていただきたい。

[後藤教育長]

総合教育会議を受けて、ただちに取り組んでいきたいと思う。

[中松教育民生常任委員会副委員長]

フリートキングのテーマの中で、高校の2番目、難関大学等に進学できる生徒が少なくなっている原因は何か、ということがある。委員に入るまでは学校の授業を直接見る機会がなかったので、この1年で第3者として授業を見させてもらった。私たちの時代と比べてずいぶん恵まれており、手取り足取りうらやましい限りである。素晴らしい環境の中で勉強しているから抜きん出た人材が育ってくるかと思うが、聞いていない。現在4校に分かれているやり方を、考え直してもいいのではないだろうか。たくさんの人数の中で揉まれることで、体力的にも勉強の面でも強くなっていく。そういったところを早急に考えていく必要があるのではないかと思う。

また小豆島町の教育目標の「ふるさとを愛し」という、基本的な部分が一番大事ではないかと考える。ふるさとという表現ではあるが、これは社会であり、国であり、あるいは町であったりする。私たちの若いころから同じであると思うが、世界史の中でかつての日本の戦争・敗戦などといったことを捉え直すということが必要である。そうしないと自分たちの国であるとか社会あるいは父親、ご先祖といったところに対しての敬意を、子どものころから持てない。だからこそ「人に迷惑をかけなければ何をしてもいい」ということを堂々と言われてしまう気がする。やはり私たちは、私たちの祖先が延々と築き上げてきた日本という国の歴史を世界の歴史の中でもう一度捉え返して、私たちの自信につなげていく、ということをやっていかなければならないのではないかと思う。教科書選定の問題もあるかと思うが、いずれは乗り越えていかなければならない問題であるかと考えている。

[塩田町長]

中松氏が言われた難関の公立大学に進学することがいいかどうかの議論はさておき、難関国立大学に進学すれば、その子の将来の可能性が広がるという大前提がある。私自身の

経験から言うと、なぜこの頃小豆島から難しい大学に行けなくなってきたのかというと、結論から言うと勉強していないからである。勉強時間が足りていないと思う。都会の子どもは小さいころから特訓を受けて難関大学に立ち向かっていますから、生涯の勉強時間があまりにも違いすぎるという一点。もし難関国立大学に進学することを望む子がいれば、道を開いてあげるためにはとにかく勉強する時間を彼らに与えないといけない。今見ていると、私たちのころは分業していたが、勉強もやる部活動もやるというように、一人の子が全部やっている。だから勉強時間が足りないのではないかと思う。難関国立大学に進学することがいいかの議論は残るが、勉強する時間さえ与えれば、小豆島からも難関国立大学に行けることは間違いないかと思う。

[熊坂委員]

いろんな意見があったが、教育というのは一言では言えないものである。学力一つにしても、本当の学力とは何か。実際に学力というのはどの程度必要とされているのか。私は高校の教員時代に就職の指導をやっていたが、いろんな会社に回り、入社試験でどんな問題を出しているのか調べた。だいたい国語、数学、英語の3教科と一般常識と社会理科の基礎的な問題を出している。国語では漢字の読み書き、数学では分数・歩合算という、小学校5年生レベルの問題が解けたら合格する。高校生の入社試験というものは、それぐらいのレベルで行われている。教員の採用試験についても、国語では文学史の基礎的な知識、漢字の書き取り、熟語の読み方、あるいは四字熟語等の知識である。そういった視点からいうと、実際の採用試験は高校入試よりもはるかに易しい。専門の小論文などは除いて、一般常識については非常にレベルが低い。国家公務員の上級の試験は非常に難しいが、採用試験では一般常識が身につけていけば突破できる。

そうすると、大学で何を学んだかということより、高校でどこまでレベルアップしたかということより、もっと低次元の問題である。現実的にはそのようなことがあり、一方で難しい大学入試を突破しなければならない。大学入試を突破できる学力を高校生には当然つけてやらなければならないが、基礎学力というものがどういったものであるかという把握が必要ではないだろうか。

町長が言っておられる難関校を突破する生徒には、特別な勉強をさせなければならない。普通の勉強ではなかなか突破できない。難関校を希望する生徒に関しては、英語数学に関して職員室で添削指導を個人指導してもらった。それはあくまでも入試を突破するための勉強であり、本当の身につけた学力は何かということ。基本的な学力が身につけていけば、社会生活では支障をきたさないのではないかと考える。受験は特別なものである。本来の学校教育として小学校・中学校においてコツコツと積み上げてきたことはなんであったのか、という感じになりかねない。私たちは特別な子供を特別に指導するのではなく、普通の子を普通に指導することの大切さを考える必要ではないか。

[岡田委員]

今難関大学の話があったが、過去の話であるが小豆島高校から私の同級生が2名東大に入った。その人の勉強もさることながら、見ていたら家族が大変であった。子どもが帰って来るまでに夕食を済ませ、物音ひとつさせないようにピリッとしていた、というようなことを聞き、家族の協力が必要だなと感じた。その子は東大を卒業していいところに入っ

たが、やはりその子の努力と家族の協力があつたように感じる。

ふるさとを思いやる子どもはどうしたら育つか。小豆島は本当にいいところで、最近マスコミに毎日のように小豆島が出てくる。北海道から沖縄まで友人から、「小豆島ってよく出ているね」と、行ったことのない人からは「一度は行ってみたい」というようなことを言われる。小豆島を出たときに、ふるさとを誇れる人、子どもを育てなければいけない。会社や職場で小豆島ってこんなところでもいいところですよ、ということを語れる人になってもらいたい。

ということから、池田中学校では昭和64年から「池中太鼓」というのを始めた。全校生徒がお祭りに参加でき、女の子は太鼓に携われないということから、太鼓に付ける笹竹に自分の想いを短冊にして掲げさせた。祭りの朝にある三都、神浦の「オシコミ」、これも歴史・伝統ということで、全校生徒を見学に行かせた。実際に船から降りる雄大さを見て、これは素晴らしいと言うことで、全校生徒が祭・ふるさとについて勉強することができた。2年生3年生の女子は、男子が太鼓を担ぐなら、女子は神輿を担ごうということで、実際に行った。子どもたちにとっても卒業してからも印象に残ることであつたし、地域の方、小豆島の方からも評価された。これは長く続いたが、太鼓が古くなったとか、企画するのが大変で、PTAの方で企画していたが考えもだんだんと変わり、面倒になってきたという役員も出てきたということから、今ではなくなってしまった。しかしこれが一つのきっかけとして、都会から祭りになったら地区の太鼓をかきたいということがあつたので、これは大事にしなければならないと思う。

また3年間でふるさとのことを勉強させようということで、総合的な学習の時間を活用して、1年生では各グループで菊や素麺、すももなどの地場産業に関することを調べさせ、2年生では小豆島や池田地区の歴史や成り立ち、地域に伝わる史話をお年寄り等から聞いて、3年生では歌舞伎やオシコミ等の池田にまつわる伝統芸能を勉強する。こうして3年間でローテーションしてふるさとをしっかりと勉強し、中学校3年間で学ばせている。そうすることでふるさとのこと、池田町のこと、小豆島のことを語れる子が育ったのかと思う。お祭りが好き、小豆島のこういったことを語りたいというような声も出てきているので、見本としていただければと思う。

[黒木委員]

私が思うに教育の最終目標は、どういう人を育てるかということだと思う。家族を愛し、友達を愛し、ふるさとを愛し、自国・我が国を愛し、それでいて世界に通用する人間性を持った人を育てる、そういったことが教育の最終目標であると思っている。そういう人を育てるために、私たちがどういったことをすればよいかということ、これから十分に考えていかなければならないのではないかな。

[岡本委員]

私の子どもは全員未成年であるが、社会に出たときに自立して社会性を持った、社会人として十分評価に耐え得る人間になってほしいな、と思っている。そのためには、学校、地域、家庭と一体となった取り組みが必要なのかなと思っている。ふるさとを愛して欲しいなという気持ちは親として十分持っており、自分の子どもには全員小豆島に帰ってきてほしいと考えている。

[慈氏草壁保育園園長]

自分の体験と、自分の子どもたちの話をしたい。私は寺の生まれで隣の星城小学校に通っていた。小学5年生で学校が変わったが、前の木造の学校から鉄筋の学校に変わると、冬がとても暖かかったし、掃除のときに棘が立つことはなかった。本当に心地よく、新しい小学校は気持ちがよかった。何が言いたいかというと、学校は家庭の環境と比べて寒い・暑いと思う。そういった意味では、学校での住環境がよければ、少しは不登校がなくなるのではないかと、というのが一点。

もう一点は、自分はお寺の子と言われて、勉強しなくてもよいのではないかとわれながら、大学を卒業してアメリカへ渡り、6年間ほど留学していた。そこで感じたのは、勉強する人はどんなに環境が良くても悪くてもするし、しない人はどんなに環境が良くても悪くてもしないということである。それぞれの人がどんな家庭環境や社会環境であるかはわからないが、それぞれ学んでいったのだろうと思う。

ふるさとを愛するということで、私はお寺と保育園をどうにかしなければならないということで島に帰ってきたが、父親が5年で亡くなり、そこから子どもたちを育てることになった。子どもは3人いるが、一番下の子は後藤教育長が校長先生だった時の6年生である。現在青山学院に進学しているが、小豆島を愛するということで、町長さんにもお願いし小豆島の産業をゼミで勉強したいというレポートを出した。ゼミの教授からもいいプロジェクトであるとの評価をいただき、1か月ほど青山学院の学食で小豆島の産業を紹介することができた。

そのように子ども全員が小豆島に帰りたいといっているが、教育というのは先生であると思う。先生がどのような手法で子どもを育てるか、子どものためを思って一生懸命やるということかと思う。私が島に帰ってきたときに、若くして島に帰って来る人は都会で使い物にならなかったからだと言われて傷ついたが、よく帰ってきた、活躍してくれと言われていればよかったようにも思う。先ほど黒木委員の発言にもあったが、国のため、人のため、世界のため、親のために、という大きな目標を持って自分が育てられるという環境が一番大事かなと思う。

[塩田町長]

今回は、2月26日15時から平田オリザさんにコミュニケーション能力についてお話ししたい。場所は調整中ですので追って連絡する。

今日はありがとうございました。